

1 統一地方選挙を振り返る——改革派首長の後退

- ・ 改革政治の限界 地域経済社会の疲弊
ムダに依拠した地方経済の構造
→「理念では飯が食えない」という本音
雇用、社会保障、教育の維持という課題
- ・ 民主政治の活力は高まったのか スーパースター依存の限界
地域リーダーの養成システムはできたのか
- ・ 無党派層とは何か 座標軸を持たない無党派層 タカにもハトにもなびく
何かを決めたい、変えたいという意欲＝大都市での投票率向上
格差を政治争点にすることの難しさ

2 反改革としての小泉路線の遺産と政策課題——格差をどう定義するか

- ・ パターナリズムの終わり 個人、地域の利益を離れた国益
自立と自己責任の強制
- ・ 平等の終わり グローバリズムと大きな不平等
政治的争点としての小さな不平等
不平等の源泉としての公共セクター
- ・ どのような国の姿を目指すのか 市場主義を国土政策に当てはめるのか
公共空間をどのように定義するか
人間の尊厳というキーワード

3 安倍政治と民意の乖離

- ・ 行政府による改憲という暴挙 解釈改憲とは何だったのか
9条と自衛隊、安保体制の両立という論理
それなりの平和国家の生き方
- ・ 「戦後レジームからの脱却」の意味 岸信介のねらったもの
戦後レジームの成果と限界
純粋戦後世代の目指す改憲論の浅さ→注
- ・ 空回りする政策 改憲ムードの実相
9条に対する支持
現状への懐疑と改憲ムード
政策課題の羅列と精神論の横行
歴史認識と「世界の孤児」への道

4 民主党の対決戦略

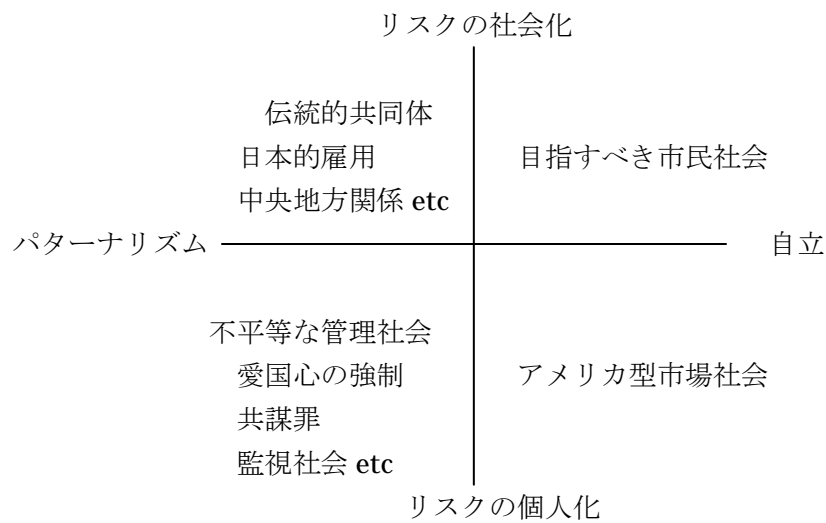
- ・ 参議院選挙の構図 安倍路線に対する国民の審判
「改憲」対「生活維新」という構図の無理

- 憲法論議の土俵に載らざるを得ない
- 戦後レジームの破壊か、継承発展かという対立軸
 - 護憲の戦列の組み直し
 - 新たなハト派連立の戦略と保守層へのアプローチ
- 生活維新の具体化
 - 戦後レジームと表裏一体の「生活保障」
 - 社会保障確保への具体論、財源論の必要性

5 ポスト参議院選挙の政治展望

- 与党過半数維持
 - 民主党の内紛と右傾化
 - 改憲に向けた翼賛体制
- 与党過半数割れ
 - 人間尊重路線の連立政権構想
 - 解散総選挙と政権交代

図 目指すべき社会モデル



注

私は、自民党若手タカ派を見ると、石原吉郎の次の文章を思い出す。

「(シベリア抑留中)作業現場への行き帰り、囚人は必ず五列に隊伍を組まされ、その前後と左右を自動小銃を水平に構えた警備兵が行進する。行進中、もし一歩でも隊伍を離れる囚人があれば、逃亡とみなしてその場で射殺していい規則になっている。(行進中つまりくか、足を滑らせて、列外へよろめいた者が何人も射殺された)。中でも、実戦の経験が少ないことに強い劣等感を持っている十七、八歳の少年兵に後ろに回られるくらい、囚人にとっていやなものはない。彼らはきっかけさえあれば、ほとんど犬を撃つ程度の衝動で発砲する。」(『望郷と海』、ちくま文庫版、1990年、36-37ページ)

まさに、安倍晋三などがこの少年兵に重なって見えるのである。